

「虫の家」から見えてくる世界

岐阜県立森林文化アカデミー 准教授 ● 津田 格

●ドイツで見た「虫の家」

9月に、本校と連携協定を結んでいるロッテンブルグ林業単科大学のサマーセミナーに参加するため、ドイツに行ってきました。約1週間のツアーの中でドイツでの社会と森林との関わりについて見えてきました。環境教育施設を訪れた際に、建物の外壁に様々な巣箱が展示されていました(写真1)。それらは鳥だけでなく、昆虫やコウモリなどの住処となるもので、大学構内にも木材や松ぼっくりを詰めた小屋がありました。以前ドイツを訪れた人から聞いたInsectenhotel(虫の家)の实物を初めて見たのです。ドイツでは、かなり普及しているようです。



写真1 ドイツで見かけた様々な巣箱

●虫の家づくりを通して

以前本誌で、ニホンミツバチが環境と暮らしの関わりを考えるきっかけとなるのではと書きました。たしかにニホンミツバチには人を引きつける魅力があります。しかし一方で、蜂蜜という甘い産物にとられすぎるくらいがあると感じていました。また、ここ数年でニホンミツバチが美濃地方で減少し、気軽に取り組むには少しハードルが上がっていました。他に森林などの自然環境に人が目を向けるきっかけはないだろうか。そのようなことを考えているときに、前述の虫の家の話を聞いたのです。その情報を参考に、虫の家作りを本校のオープンカレッジ(生涯学習講座)で行いました。まずは小屋を建て、細い竹で作った虫の家を設置しました。竹筒の細い孔に営巣する昆虫には、狩り蜂やハナバチの仲間がいます。設置した竹を割ると、ハチの幼虫や幼虫の餌として集められたクモなどが観察できました(写真2)。何気なく見過ごして来た生き物の暮らしが、途端に生き生きとしたものになって目に飛び込んでくるようでした。参加者の方には自宅で



写真2 竹筒の内部に詰め込まれたクモ類

も同様の試みを行ってもらうため、ドイツの例を参考に可愛い形の虫の家を作って持ち帰ってもらいました(写真3)。

講座で行った虫の家作りは、身近な自然について改めて目を見開かせてくれました。しかしかつては私たちのすぐ近く、例えば茅葺き屋根の中にも昆虫達が普通に暮らしていたはず(写真4)。けれども家屋の構造や素材の変化により、これらの昆虫は近から姿を消したのです。これはほんの一例に過ぎず、私たちの暮らし方や社会状況の変化に伴い、ひっそりといなくなったものは他にもいるはずです。虫の家作りは昆虫達に住処を提供するのみならず、私たちの暮らし方や自



写真4 「虫の家」となっていた茅葺き屋根。虫が利用している茅の末端が白く詰まって見える



写真3 可愛い形の「虫の家」(撮影: 森田綾子)

然環境との関わり方についても改めて考えさせてくれるのです。

ドイツでは自然保護法が制定され、多くの自然保護団体が活動しています。自然保護に関連する法的な規制が厳しい一方で、多くの人々が日常的に森林に足を運び、自然とのつきあい方を意識し、行政や産業界に働きかけています。林業の現場も例外ではなく、経済性のみならず生物多様性を高め維持していくような管理が求められています。身近なところから自然を見つめ直していくことは、今後の日本においても重要性を増していくことだと思います。